

【技術分類】 3-2 組物／組紐以外の組物

【技術名称】 3-2-2 房飾り

【技術内容】

一般に房というのは単独では成り立たない。紐と一体で使われる。紐の先に作られた房はより華やかに潤いを見せたり、宗教的荘厳さを高める為に効果的なため、実用性よりも装飾用として用いられる。房のもとには紐であって、その紐も多くは組紐が使われる。

房を作るにあたっては神仏用など長い伝統のものについてはその素材、組み方、結びなどが故実にしなっていて定められている場合が多い。

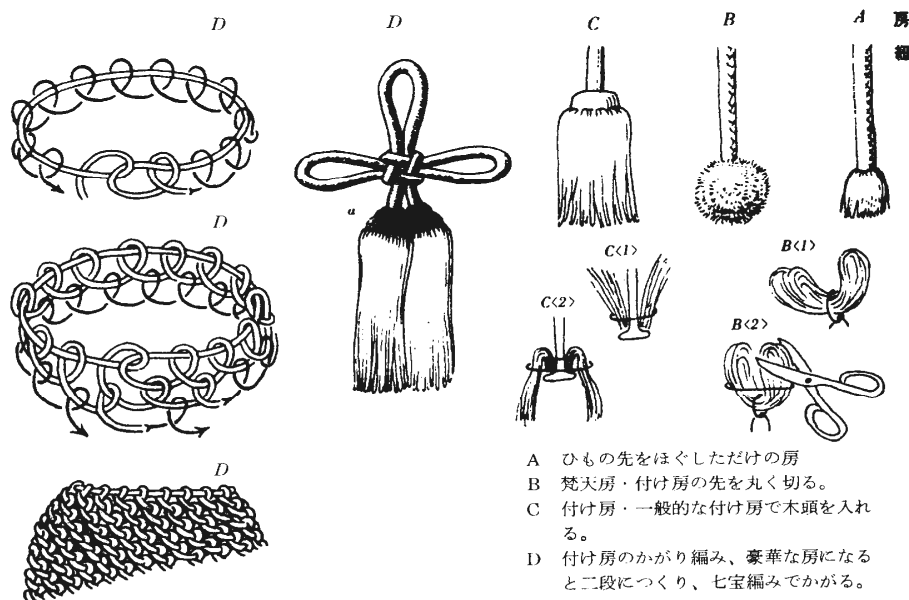
その製作では、まず、装飾結びに必要な長さを計算して、紐を一定の長さに寸法切りをする。そして、その先端をほどいて房にする。このとき、ほどいたままで房にする技法は、帯締め・羽織紐に見られる。帯締めに見られる房としては切りふさ、菊ふさ、たこ足、ぼんてん、撚りふさなどがある。

また、先を少し太く見せるために、足し房と言って、同色の糸を足して房を作ることがある。一般の房の場合、紐よりも房を大きく見映えよくする必要があるので、上くぐりと言って、紐の末端に大きな玉を作ったり、木頭を入れて、それを外から糸で美しくかがって包み込む。特に大きな時は七宝編みなどで包んで豪華さを出す。房紐の制作方法を図1に示す。

帯締め、羽織紐以外の房は必ず結びと一体で飾られる。使われる結びは総角（あげまき）結び、淡路結び、華慢（けまん）結び、釈迦頭、七宝結び、菊綴（きくとじ）、根緒結びなどである。結びの例として総角結びを図2に示す。

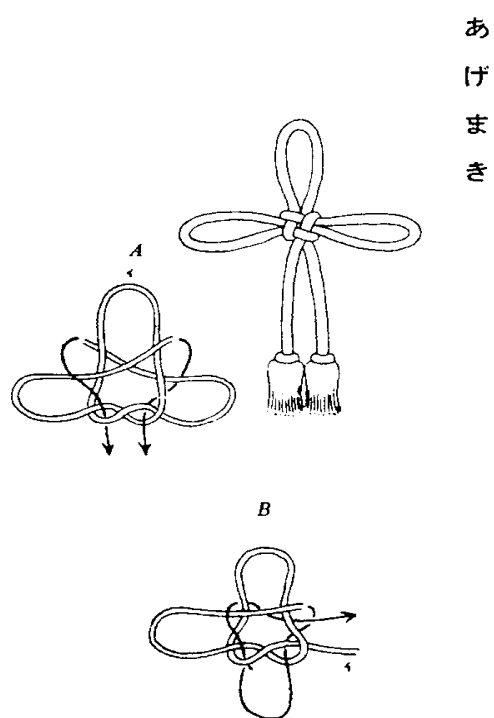
【図】

図1 房紐の制作方法



出典：「京くみひも」、1979年3月、菅沼晃次郎著、民俗文化研究会発行、141頁 房紐

図2 総角結び



出典：「京くみひも」、1979年3月、菅沼晃次郎著、民俗文化研究会発行、145頁 あげまき

【出典／参考資料】

「京くみひも」、1979年3月、菅沼晃次郎著、民俗文化研究会発行